

## 書評

### 巨人との舞踏会：米中勢力争いのはざままで

浅沼 信爾

元一橋大学公共政策大学院教授

David Shambaugh, *Where Great Powers Meet: America & China in Southeast Asia*, 2021, Oxford University Press

東南アジアは歴史的に常に東西の商人と覇権国が去来するクロスロードだった。古くはインド、中国、アラブ、西ヨーロッパ、そして 20 世紀に入って軍事進攻をした日本、さらに第二次世界大戦後に勢力を伸ばしたアメリカが東南アジアを舞台に覇を競ってきた。この歴史の流れの中で外国勢力の植民地になった国も多いが、第二次世界大戦後は独立国家として発展してきた。今この地域に中国が破竹の勢いで進出している。その結果、20 世紀からの覇権国家アメリカに対抗する 21 世紀の新たな覇権国家中国という図式が、東南アジアにも露わになって来た。

アメリカにおける中国政治の専門家として名高いジョージ・ワシントン大学教授のデービッド・シャンボーは、本書の中でこの東南アジアを三つの視点から論じている。すなわち、第一にアメリカは歴史的にどのように東南アジアに関わってきたか、そして現在のアメリカの立ち位置はどうなっているか。第二に、そのアメリカに対抗して勢力を伸ばしている中国の歴史的なかわりと現状はどうなっているか。そして第三に、東南アジアを舞台とした米中の勢力争いの中で、当事者の東南アジア諸国はどのような国際関係を築こうとしているのか、の三視点だ。

アメリカは第二次世界大戦後、アジアにおいて朝鮮戦争とベトナム戦争という二つの戦争を経験した。そして、この二つの戦争を通してアメリカは、冷戦下でソビエト主導の社会主義圏のアジアへの進出を阻止する目的で、周辺国に多大な安全保障面での「投資」を続けてきた。その結果、今日においても東南アジア諸国とは、政府対政府のみならず軍対軍レベルでも広く深い繋がりを持っており、この面では中国をはるかに凌駕している。また、社会主義圏が消滅し、東南アジア諸国のすべてが市場主義を旨とする国際経済体制に組み込まれた結果、経済的にもソフトパワーという意味での文化的にも、アメリカと東南アジアの繋がりには強固だ。

しかし、将来を展望するとき、アメリカには弱点がある。歴史的にはアメリカはヨーロッパの列強とは一線を画した反植民地政策、市場開放政策をとって来たが（もちろんフィリピンを植民地として来た歴史は消すことは出来ないが）、東南アジア諸国からは、アメリカはヨーロッパの植民地主義的覇権国家群と同一視されている。第二に、アメリカの外交姿勢には常に人権擁護や民主主義を他国に押しつける思想的な不寛容さが際立っていることだ。その不寛容性のためにアメリカの勢力圏から押し出されてゆく国がある。ミャンマーやカンボジアが良い例だ。第三の弱点は外交上のもので、アメリカの

東南アジア諸国に対する関心がともすれば持続性に欠け、しばしば無関心な政権が出てくることだ。まさに「距離の専制 (tyranny of distance)」だ。最近では、オバマ政権の下ではアメリカ外交のアジアへの回帰が計られたが実行面では不満足で、次のトランプ政権では無関心が露出した。

一方の中国はどうかというと、歴史的には宋代、元代に中国と東南アジア諸国との交易は、冊封体制という中国を盟主とする主従関係の下で飛躍的に発展したが、そのシステムは帝国主義・植民地主義の時代に崩壊し、第二次世界大戦後も中国は主体的に海外進出をすることはなかった。それを一変させたのは 1970 年代後半に始まった鄧小平の改革開放運動だ。中国はそれ以来 GATT/WTO 体制に入り、今や「世界の工場」の中心として東南アジア諸国との広く深い貿易・投資関係を築いている。このように、東南アジア諸国における経済面での中国の存在はアメリカをはるかに凌駕している。それに加え最近年では、アジアからヨーロッパにかけての統合されたインフラシステムの構築と、それをベースにした広域経済圏の構築を目指す壮大な「一帯一路」計画が始められ、経済面での中国の進出は目覚ましい。

では、対東南アジア関係において中国はなんらの弱点も持たないかということ、そうではない。第一に、東南アジアの経済には国によって程度の差はあるにしても、歴史的に華僑が経済に大きな比重を持っている。しかし、華僑の存在自体が、東南アジアの国々にとって中国に対する警戒感を抱かせる要因にもなり得る。中国政府にとって華僑は中国進出の助けとなる味方ではあるが、しばしば起こる対華僑暴動が示すように東南アジア諸国民の不満の対象にもなる。第二は、これは最近習近平時代になってから顕著になっていることだが、中国の過度に声高な自己利益の主張と領土拡張の試みだ。南シナ海での軍事的拡張やその他の地域でも見られる領土復権主義は、「戦狼外交 (warrior diplomacy)」と言われる外交態度と相まって、東南アジア諸国からのバックラッシュを引き起こす可能性がある。中国の外交姿勢がこれらの国にとって新植民地主義的に見えると、これは東南アジア諸国の主権国家としての独立性を侵すものととられ、強い反作用を起こす可能性がある。

最後に東南アジア側を見ると、もともと東南アジアは、アジアでジャーナリストとしてほとんどの生涯を過ごしてきたマイケル・ヴァティキオティスがいみじくも言ったように、歴史的に東南アジアは外から内から覇権や交易を求める勢力が往来する「風が渦巻く地 ("Lands Below the Winds")」だ。<sup>1</sup> 列強の勢力争いに挟まれてなんとか独立国として生き延びてきたタイを含めて、その他の植民地化や軍事占領を経験してきた東南アジア諸国は、押しなべて外に対して国を開放しつつ、国家の独立性を重視しながらその存立を守る政治理念が強い。底流には強い民族主義がある。基本的に米中という二大覇権国家に対しては抜きがたいアンビバレント (両義的) な態度をとり、それが事実か

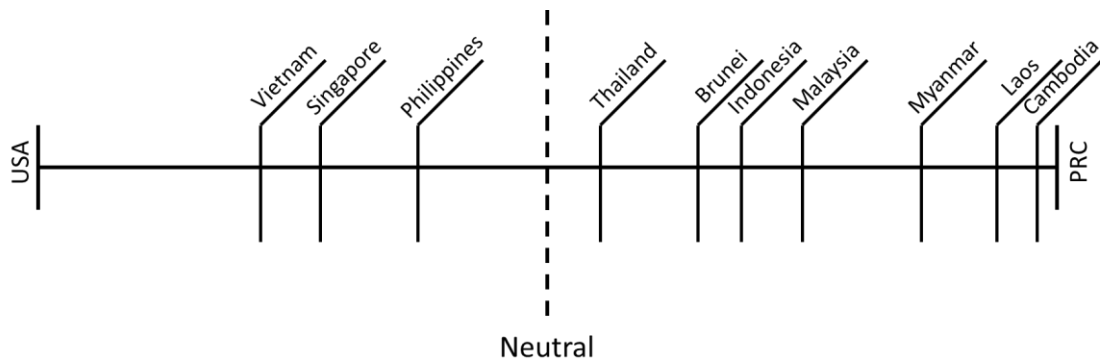
---

<sup>1</sup> SRID ジャーナル第 14 号 (2018.01) 書評、浅沼信爾「東南アジア社会の深層」。  
Michael Vatikiotis, *Blood and Silk: Power and Conflict in Modern Southeast Asia*, 2017, Weidenfeld and Nicolson.

単なる感觸かは別にして米中の新植民地主義的な外交態度に対してはセンシティブだ。

第二次世界大戦後の米ソ冷戦時代には、南北に分かれて自由主義陣営と社会主義陣営に入ったベトナムや、アメリカの東南アジアにおける軍事作戦に基地を提供したフィリピンのような事例もあるが、同時にインドネシアのようにどの陣営に与することも拒否し、「非同盟運動(Non-allied Movement)」に肩入れして中立政策をとった国もある。その伝統を汲んで、米中の勢力争いの真下で東南アジア諸国はそれぞれに、勢力均衡(Balancing)、順応(Accommodating)、機会主義的(Opportunistic)、危険回避のための両面作戦(Hedging)、等々のニュアンスある戦略をとっている。そしてその戦略は当然両国の勢力均衡の変化に応じて変化する。またある場合には量子力学の「シュレジンガーの猫(Schrödinger's Cat)」に例えられる戦略もある。すなわち蓋をした箱に入れられたネコは生きていますか死んでいるかは、観察者が箱のふたを開けて見なければ分からない。

それでは、ASEAN はどうか。東南アジア諸国がそれぞれに米中の勢力争いの中立政策をとるのは難しい。しかし、米ソの冷戦時代に非同盟運動が起こったように、ASEAN として団結すれば米中の二極に対して中立の第三極を形成できるだろうか。しかしこの可能性に対してシャンボーは否定的だ。ASEAN の加盟国の国際政治的な立ち位置は多様で、米中に対する国際政治的距離もそれぞれ異なっている。もともと ASEAN は相互不干渉、全会一致を原則としているので ASEAN 独自の思想や立場を対外的に強く主張できない。その上に、ASEAN の指導者であるべきインドネシアは、国内志向が強く積極的に ASEAN をリードしようとしな



Spectrum of ASEAN states' relations with the United States and China

その結果、東南アジアの各国は、それぞれに自己の利害関係を勘案して、米中との距離を保っている。距離と言っても客観的な指標があるわけではないが、シャンボーは現状における東南アジア諸国の対米中距離感を上のスペクトルで表している。

このスペクトルで顕著なのは、東南アジア諸国のほとんどが最近年になって中国との距離を縮めていることだ。シャンボーの意見では、カンボジアはほとんど中国の傀儡国家(client state) だし、ラオスも中国に隣接する共産党政権国家という点で非常に中国に近い。ミャンマーは、その軍事独裁制度のために国際社会で孤立を続け、内政不干渉を

旨とする中国と近い関係を維持してきた。タイ、ブルネイ、インドネシア、マレーシアが中国との関係を緊密にしているのは、貿易・投資の経済関係が濃密だからだ。他方、ベトナムは歴史的に中国に対する警戒感が強い。また、フィリピンのアメリカとの歴史的関係は広く深い。シンガポールは、誰もが認める最良の国際政治バランスサーで、両国と絶妙な距離をとった政策を展開している。

ただ、このスペクトルが示すのは「現時点での印象を図式化したもの」で、事態は流動的だ。米中の勢力争いは激化しており、東南アジアにおけるアメリカの覇権が退潮にあるのは疑いがないにしても、アメリカが東南アジアに作り上げた影響力の根は深い。また、アジア金融危機のあった 1998 年からリーマン危機の 2008 年の 10 年間は、中国 ASEAN 関係の黄金の 10 年間と称して間違いのない、良好な関係が進展した特別な時期だった。その良好な関係が今後順調に発展してゆく保証はない。いずれにしても、東南アジアを舞台とする米中の勢力争いは今後も長く続くロング・ゲームだと考えるべきだ。アメリカの舞台からの退場が早々にあるとは思えず、また中国の覇権拡大が順調に進むとも思われない。

シャンボーは、将来の展開として四つのシナリオを描いている。第一は彼が「バンドワゴン効果 (bandwagoning) と呼ぶ現象で、勝ち馬に群がるように東南アジアの諸国が一斉に中国になびく、言ってみれば東南アジアのカンボジア化、ラオス化のシナリオだ。第二は、現在のように外交・経済・文化のレベルで「ソフトな勢力争い (soft rivalry)」が持続し、米中の「競争的共存 (competitive coexistence)」が常態となるシナリオだ。第三のシナリオは、ソフトな勢力争いが局地的な紛争を伴う「ハードな勢力争い (hard rivalry)」に発展するシナリオだ。そして最後に第 4 のシナリオとして、中国が過激に強硬な外交姿勢をとり、その結果東南アジア諸国のバックラッシュ (neutral hedging)」を招く、いわば中国の失敗シナリオだ。

このように四つのシナリオのうちどのシナリオの可能性が一番ありかつ望ましいかは、シャンボーは明言していないが、それが第二のシナリオであることは明らかだ。しかし、現実にはどのシナリオが展開するかは、東南アジア諸国だけでなく、米中のそれぞれの戦略と政策によるわけだが、いずれにしても東南アジア諸国の持つナショナリズムと中立化志向の DNA を忘れるべきではない。

二つの覇権国のはざまにある国々は二匹の巨象の足元の牧草に例えられる。巨象が喧嘩をしても、あるいは愛を語っても、足元の牧草は踏みつけられるだけというのだ。しかし、わたくしは巨人との舞踏会の例えの方が好きだ。なぜなら、舞踏会ではどちらの巨人と踊るか、どう踊るかを自主的に決めて、自主的に行動する余地があるからだ。シャンボーが描く舞踏会は、米中の巨人の他には東南アジア諸国だけが招待されているようだが、現実には北東アジアの日本や韓国、それに南のオーストラリアや西のインドをはじめとする南アジア諸国も舞踏会に参加している。そこでは FOIP (「自由で開かれたインド太平洋」) や QUAD (日本、アメリカ、オーストラリア、インドの同盟) や AUKUS

(オーストラリア・イギリス・アメリカ軍事同盟)のような外交・安全保障ゲームも演じられている。ないものねだりに近いが、シャンボーには米中・東南アジアの三者の他に、米中関係に決定的な影響を与えるこれら近隣のミドル・パワーのこともしっかりと書き込んで欲しかった。

いずれにしても、これから何十年も続くであろうアジアにおける米中の勢力争いとその影響下にある諸国の問題を論議するためには必読の著作だ。